美紗の会 たより

煙草のけむりの物語

西松 布咏

私は、ただただ逃げているのです。

これからの始まりはすべて私の物語でございます。

「アジール」公演での二代目高尾太夫になって演奏した時のせりふである。

昨年の秋はこの言葉に始まりいつしか冬になり新年を迎えるに至った。

この公演の最初は新潟角田山妙光寺。今から七百年前、日蓮大聖人の弟子日印上人により建立された由緒ある寺院の小川英爾ご住職との出会いは十三年前になる。岩室温泉老舗旅館「高島屋」で田中優子さんとの「友達ライブ」公演の打上げ会に隣席した折に「ひとりひとりの墓」の御著書をいただいた。生者の墓「安穏廟」を全国に先駆け実施し、新しい寺の方向性を模索してゆく画期的な取り組みに興味を持ち、その後お尋ねしたのがきっかけとなった。

築二百五十年の歴史を持つ風格のある佇まいを残しながらご住職と檀家の英知で斬新な建物に一新した玄関のなんと広い事！来るものは拒まずという宗派を超えた風通しの良い境内を拝見しながら、いつかは三味線を響かせてみたいと長年来秘かに思い続けていた。

十月十九日の宵。あたりが闇に包まれる頃、行燈の灯が揺れる客殿に緋色の毛氈が長く敷かれ、障子を背景にした舞台の真ん中に正座する。吉原の客を呼ぶ賑やかな『すが掻き』の三味線で始まる「アジール」公演がついに実現した瞬間である。すると「一日を十三時に延ばしてもまだ会い足りぬ恋の欲：」と嘘とも真実ともわからぬ遊女の想いを演奏し始めた私を目がけて天井から様々な塊が黒い雨のように降ってきた。唄い慣れた文句なのに不覚にも「務め離れた真実の：」が続かず大失態をしてしまった。さぞスタッフは慌てただろうとあまりのふがいなさに客に謝ったが、あの時の重圧はまさしく先祖の霊が私を金縛りにしたとしか思えない。

このところ私は「江戸唄」と称し江戸時代の遊女の唄を繰り返し唄っている。いつしか私の声は望憶の声となり遊女の成就できなかった想いが聞いて下さる人様に届くはず…と恐れ多くも思っていた奢りを戒められたようで自分に自信が持てなくなり私は舞台人として不適格なのではないかとまで思いつめた新潟公演となった。

十一月二日初めて訪れる弘前はすっかり秋色に染まっていた。

会場となった「専求院」は開闢来三百九十年。津軽藩時代の岩木川は三途の川に見立てられ弘前城と岩木山の軸線上にある寺の入り口に閻魔と脱衣婆が安置されている。古くからあの世とこの世の結界に位置するこの寺を今日、人々が集まる自由領域「アジール」にしたいと願っている若き村井ご住職の熱い想い。その夢を実現すべくたびたび交渉を重ねた公演主催のＪＣＤＮのプロデューサー水野立子さんの並々ならぬ努力で、当日は若者から年配まで幅広い客層で満員の盛況となった。

本堂の襖をスクリーンに見立て写しだされる飯名尚人氏のシュールな映像。黒いドレスに身を包み研ぎ澄まされた女の情感を手足の先まで演じる寺田みさこさんのダンス。そして語りを交え江戸の遊里に身を置く女を唄う私。

目前に仏様が安置されている本堂は江戸時代と現代の男女の物語が自由自在に往き来する異空間となり大いに観客の心を捉えたようだった。終演後は弘前大学の教授や学生も参加して賑やかな打上げ会となった。伝統を大切にしながら新しい文化と街づくりに積極的に取り組んでいる若者達のきらきらと輝く瞳に接し、萎えかけた私の心の原点が甦ってゆくようで忘れられない夜となった。

Photo：村井勇（アトリエラボン）

いままでの小春日和に変わり冬を感じる公演の翌日は雨もよいだった。帰りの飛行便まで町の散策をと、気になっていたホテル近くの骨董屋に立ち寄った。持ち帰るような小物がなくそっと去ろうと思った時、硝子ケースの中に鎮座している小さな煙草盆に吸い寄せられた。裾を引いて客に吸い付け煙草を差し出す高尾太夫がまるで私を待っていたかのようで。

「アジール」で私は遊女となり、演奏の後、祖母が使っていた長い煙管を胸元から取り出し、ふうっと煙草を吸い終わった後、何度も冒頭のせりふを言ってきた。これからのはじまりはすべて私の物語でございますと。

様々な思いが煙草のけむりとなった公演の旅を忘れないように…と即座に落手した。

今、その煙草盆は私の部屋でまるで主のような存在である。

江戸の遊女達は様々な思いを秘めながら煙草のけむりに心を託していった。ある時は辛い過去を忘れようと。ある時は溢れ出る恋心を隠そうとして。

それはきっと人間本来の溜息だと思う。

だから私はそのけむりの先に続く物語を唄って行きたいと思う。行く末がますます朦朧としてゆく今こそ未だ見えぬ光を求めて。

又新たな気持ちで唄い続けて行きたい。

息・呼吸が同期する瞬間
―「千壽文の會」の記憶

福岡 俊弘

「呼吸を合わせる」「息ぴったり」―歌舞伎、文楽に限らず、日本の芸能は、「ブレス（息、呼吸）」という言葉による言い回しをよくする。文楽で言えば、大夫と三味線、床と舞台、人形遣いと人形遣い、主遣いと左手遣いと足遣い。それぞれに自分の、そして相手の呼吸を感じ、その場の「間」をつくり出す。それはタイミングなどというありふれた言葉ではなく、「間（ま）」としか言いようのない時間と空間の感覚があるように思う。「間」と「息」。物語を最高に演出してくれるのは、そんな〝束の間〟の時空だったりする。

例えば、文楽「曽根崎心中」天神森の段のクライマックス、まさに心中に及ぶ場面。お初、徳兵衛のちょっとした所作だけで、二人の荒々しい息づかいが聞こえてくる、いや、聞こえる気がする。ここでも「息」。徳兵衛がお初の上になり小刀を振り上げたとき、徳兵衛の心臓が電車の発車ベルのように激しく打つのが伝わってくる。そう思わせてくれるのは、人形の首（かしら）の、少しだけ横を向く動きや、小刀を振り下ろすのを躊躇うわずかな時間にあるように思う。絶対時間にすると一秒もないだろう。が、その刹那に、われわれのイマジネーションは覚醒し、あらゆる感情を湧き起こしてくれる。まさに「間」の魔法。

いささか前置きが長くなったが、そんな「魔法」が乱打されたのが、われらが千壽文師匠が会主を務められた「千壽文の會」だった。夏の空気にようやく秋の気配が押し寄せた九月末、場所は証券会社が立ち並ぶ日本橋兜町。金融街のど真ん中の無機質なビル、その最上階に上がると、殺風景な街並みからはとても想像できない素敵な劇場施設があった。すでに異空間。

舞踊の鑑賞は、少なからず視覚の緊張を強いられる。舞い手の所作を漏らさず見ようとすると、瞬きすらもったいないように思えてくる。が、その緊張がふっと消えるときがある。こちらが舞い手の位相に、スッとシンクロする瞬間。ほんの一瞬なのだが、全身が重力から解放されたような、そんな感覚。おそらく、舞い手と自分が、束の間、一体になったのだと思う（思いたい）。

「黒髪」は、「魔法」そのものだった。

食い入るように見つめていたのは、千壽文師匠の着物の袂。袂が演技をしていた。ぱさりと払った袖が会場の空気を揺らす。女の情念が揺らいだように思えた。「黒髪」が「白雪」となるまで。時間にして、わずか四、五分。その束の間に、女性の一生分の思いが語られていた。圧倒された。

そして、布咏師匠の歌声に身を委ね、もう呆然と舞台を見ていたように思う。ふはー、という溜息を漏らしかもしれない。ひと言で言うと快感。あの日の断片的な記憶を記しておこう。

「結ばれたる思いには……」— 息をのみこんだ。

「独り寝る夜の仇枕」

— 息を潜めて、物語の世界に　はまり込む。

「愚痴な女子の心も知らず」

— 瞬間、息を止めていたかも知れない。そして、

「昨夜の夢の今朝覚めて」

— いえいえ、まだあの日の夢を見続けてる気がします。

「美紗の会」に思ったこと

相馬　由紀子

通勤の朝。歩道に落ちた枯れ葉が靴の下でカサッと音を立てたとき、急にひとつの歌が心に浮かんだ。

「奥山に紅葉ふみ分けなく鹿の声きくときぞ秋はかなしき」

子どもの頃遊んだ百人一首の中のひとつ。紅葉や鹿の言葉が子どもの私には理解しやすく、上の句が読まれるのを待っている歌ではあったが、特に心惹かれるわけでもなく長じて思い出すこともなかったのに。

そして、そのあと、館山節の歌詞が浮かぶ。「鹿の泣く声聞けば昔が恋しゅうてならぬ」

少し前の稽古のとき布咏先生が仰った。「奥山で全て忘れて穏やかに暮らしていたけれど、ここで心が掻き乱されるのよね。今の唄い方だと、ずっと穏やかで心の変化は無いわね」

そう言われたことを考え続けていた訳ではもちろんない。けれど、その言葉が体のどこかしらにずっと有り続けたのだろう。

分かったなどとはおこまがしくてとても言えないが、二つの歌の世界が一緒になって今ここにあるような気がした。

稽古のとき、布咏先生は本当に沢山のことを仰ってくれる。技術的なこともあれば曲の解釈、背景、本質…気構えのこともある。自分が全く気づかなかったこともある。違和感を感じながらもそれが何なのか分からずもどかしい思いでいるところを、言葉にして鮮明に見せてくれるときもある。

どれもこれも私の中に真っ直ぐに飛び込んできて、すとんと胸に落ちる。ずっと教えることを仕事にしてきた私だから、それがどんなに凄いことかよく分かる。たとえ正しいことでも価値あることでも、受け手の今と合わなければ決してその心には届かない、という経験を山のようにしてきたから。先生は私の今を見てくれているのだと実感できる。

友人が「心から師と呼べる人を持つ者は幸せだ」とよく言っていた。つくづくそう思う。

十一月十六日、美紗の会。

布咏先生の唄われた「海晏寺」が未だに心から離れない。

目の前には海晏寺の燃えるような紅葉。千壽文先生が私の柔な想像力では描ききれない女性像をくっきりと浮かび上がらせ、その女性の人となりさえも感じ取らせてくれた。「私とお前」二人が辿ったであろう年月も想像し、最後の歌詞「お前と初めて逢うたとき」を聞いたときは、（他の言葉ではない）その言葉を口にする女性の思いに圧倒され、堪らず涙が零れた。

美紗の会の後、まだお稽古に伺っていない。早く稽古したいと思う。どんな唄に出会えるのかとても待ち遠しい。

時間を描く ー アジール再演の事

飯名 尚人

今秋、念願の「アジール」再演が実現した。実際のお寺を舞台に見立て、布咏さんの三味線、寺田みさこさんの踊り、僕の映像を合体させたこの舞台作品は二年前に京都と東京で上演された。

再演会場となったのは、新潟の妙光寺、弘前の専求院である。新潟の妙光寺は七百年前に創建され、会場となった客殿は江戸時代中期に建てられたものを、木造の骨組みは当時のまま残しつつリフォームされた建物で、中に入れば黒くて太い柱は当時の木材であることが分かる。このお寺は、「安穏廟（あんのんびょう）」という宗派に関わりなく受け入れ、跡継ぎを必要としない墓を全国に先駆けて創設したことでも有名である。生活宗教として仏教を現代社会に組み入れ、実践している。会場そのものが、作品「アジール（避難所）」のテーマを持っているような気がしてならない。

新潟公演では、画家の渡辺隆次さんの自然画を障子に映写し、その絵の前で布咏さんの三味線と唄が続く。渡辺さんがこの時期に、妙光寺で個展をすることになっており、「アジール」はその企画の中に入れてもらったというわけだ。彼の山梨アトリエには、大きな庭があり様々に美しい野草が生息している。渡辺さんが言う。「このところ山梨のこんな山奥でも開発が進み、植物が芽を出すところを探している。だから、植物が僕の庭に逃げてくるんです。僕の庭は植物のアジールなんです。」

逃げているのは人だけでは無い、そういう時代なのだ。植物もアジールを求めて逃げて来た、とは驚いた。

渡辺さんの山梨アトリエで日記を見せて頂いた。日記といっても、絵の日記であり、渡辺さんが拾って来た枯れ木を、和紙に墨色で描き、描かれた日付と印が押してある。デッサンである。その一枚一枚の絵日記が繋がった絵巻が何本もある。この絵巻日記は一升瓶の日本酒の空き箱に一見無造作に入っており、あくまでも日常的な日記であることを表している。絵にはドローイングとデッサンとがある、という話を以前別の画家から聞いた事があった。「ドローイングは、自分の中の形の無い何かを描く、だから自分でもどういう絵になるか分からない。デッサンは、じっくり時間をかけてそのものを見続ける、穴が開くほどその対象を見るのだ。」なるほど。本当にそういう定義なのか知らないが、その感覚は納得できる。彼の定義でいくと、渡辺さんの絵日記はデッサンである。木が枯れ落ちて「枯れ木」になるという時間、それを拾ってきた時間、その枯れ木を部屋の片隅に置いておき、さて今日はどれを書こうかという時間、そして、その枯れ木を描いている時間。様々な時間が日常生活で過ぎ、時折立ち止まっては思い馳せる。そんなことを思い出しながら、舞台本番、布咏さんの演奏を聞く。江戸時代の木造建築の中で響く三味線の音は、適度に乾き、適度に湿った時間の奥行きを感じる。

布咏さんの演奏は「危うさ」を持っている、と僕は思う。ハッとさせる瞬間がいつもある。この危うさが毎回の舞台を楽しませてくれる。それを「艶」とも「粋」とも「キュート」とも言うかもしれない。（観に来た若い学生たちが布咏さんを「かわいい！」というのである。）そんな演奏風景を見聴きし、「布咏さんは、この曲を一体何回、何百回、唄って来たのだろう。」と思う。聞けば芸歴六十年。妙光寺七百年の歴史には及ばぬが、人の一生を思えば、六十年、その時間にあった三味線の音色は日々違ったことだろう。毎回危うさを持ちつつも、何度も何度も唄い、魂のような何かで一音一音当てていく。そしてデッサンのように、じっくりと女と男の愛くるしい心の物語と宿命を観察し、描く。演者は、時間をかけ、じっくりと細部を見て、作者が描いた風景を目の前に広げてくれる。

時間はこうしている間にも過ぎていき、あっという間に冬になったが、公演最後に発した布咏さんの「私はこれからも走り続けます」という言葉が強く心に残っている。

Photo：村井勇（アトリエラポン）

Photo : Junko Saito

江戸と前衛とアルタミラと
―十一月二十三日音ほぐし　ヤリタミサコ

四谷三丁目の交差点近く、新宿通りから少し奥まった土の路地を歩くと、昭和の時代の夜の匂いがする。茶会記は、戦前の文化人の邸宅だったと思われる。蓄音機からどれほどの音が流されたのだろうか。空間にその音たちの記憶が残されている。ピアノのある洋室に、畳が敷かれ緋もうせんがかけられる。紅葉の帯に薄いブルーの着物の布咏さんが登場し、三味線の調弦が鳴ると、一瞬にして夢幻の空間に引き込まれる。泉鏡花の非現実の世界のような。

季節の紅葉狩りを題材に、江戸のロマンスの「海晏寺」。「さび鮎」では、しっとりとした女性像がテーマで、若くない女の情緒が成熟した鮎に象徴されている。「夢の柳橋」は吉原入口の柳橋の風情と遊女文化。刹那の恋であっても、恋は恋。「むらがらす」は吉原の朝のきぬぎぬの別れ。朝の時間を知らせる鐘の音にたいして「明けの鐘（かねっ）」と悔しそうにアクセントがある。「箕輪心中」では、ドラマティックな三味線の音が心をざわつかせる。叶わぬ恋は聞き手の心を締めつける。無伴奏で最後に唄いあげる「君と寝やろか五千石とろうか何の五千石 君と寝よう」の歌詞が切なく響く。胸の下からぐっと迫るものがある。そして、「きりぎりす」の明るく楽しい唄で、弾んで終わる。

「粋」という美学は、すべてを言いつくさない。どちらかというと足りないことによって想像力をかき立てる美学。恋情や嫉妬、熱情や絶望、エロスとタナトス、といった激しい感情を抑制することで成り立つ。江戸文化は、こういった「粋」を好んだ。我慢であり、抑圧でもあるのだが、運命に翻弄される人生を受けとめる姿勢においては、あきらめも重要な美学に違いない。

布咏さんの唄は大げさな演技もしないし、濃厚な情熱も上塗りしていない。歌詞に込められた感情が、芳醇な声によって立ち上がってくるだけだ。が、二十一世紀の人間の心の底にも響いてしまう。聞き手の底に張られている見えない共鳴弦が、黙って聞いているだけで共振してしまう。

ある人は、西洋のベルカントのようではない自然な声の響きと評しているが、確かにそうだ。ベルカントが、鋼の弦をハンマーで叩いて固い木の箱に響かせるピアノと同じように、人間の声帯を震わせて身体に響かせて出す音とすると、布咏さんの声は、アシ笛に自然の風が通って鳴る音のようだ。オルフェウスやパンなど、ギリシアの昔の楽器はこうだったのだろう。

戦前の文化人は、小唄や端唄のいくつかは身につけていて、旦那芸という言葉もあった。美術のジャンルでも、陶芸や掛け軸などの東洋美術は茶道とともに文化人の必須。西洋と東洋の文化をともに解するのが真の教養人であろう。ここ茶会記では、そんな文化人たちが集った空気が残っている。

この日の「音ほぐし」は、すべてがアンプラグド。古い洋館の壁の響きは音を撥ねつけず、吸い込まず。布咏さんを含めて、みな、音の粒が肌で感じられるような演奏だ。stillifeの二人は、ロウソクの灯りだけでの演奏。石、ガラス、水、木の枝、貝がら、などの自然素材から音と空気を作りだす。音の手ざわりが感じられる。ロウソクの火の上に水がきらめいたとき、私はアルタミラの洞窟で、土と水とでこの

ように楽しんだにちがいない！というDNAの中の記憶が走った。すばらしいのは、stillifeの二人は、いつでも「世界で初めてこの水にさわった、この石にさわった」というドキドキ感で音を出していること。赤石拓海さんのハーディガーディは、予想外の音から始まった。プリペアードピアノのように弦に仕掛けをほどこした、ノイジーな音。予想のつかない音が発生する。後半の二曲は、メロディのあるなつかしいヨーロッパの民謡のように、素朴で温かい。藤田陽介さんの手作りオルガンは、セッティングからすごい。自分の身体の一部をとりはずして、外部化していくような組み立てから始まる。肺を外へ置き、声帯を箱の上に置き、気道をホースでつないで、というような。藤田さんが呼吸をコントロールしていく中で、それがだんだん有機的な組織として動き出し、木も金属もすべてひっくるめて生き物の呼吸となる。おそらく過呼吸による効果も発生するだろう。音声的な技術としてホーメイを見せたが、アクロバット的な超絶技巧ではなく、等身大でこの土地に立つ人のホーメイだと感じた。

古代の記憶のアルタミラから、中世ヨーロッパから、江戸から、アジアから、それぞれの時代の一場面から抜け出てきた音たちの前衛舞踏のようだった。時代を超えたアヴァンギャルドの凄みである。

冴えの響き

冷泉 淳

赤い高座に、和装の青が映える
その赤とも青とも判らないが、同じように映える
彩度をもった唄声が
スッと、真直ぐに空間へと差し込んでゆく
まるで空気を揺らすことが無いかのように
磨き抜かれ、抑えられた節が
シックだ
削ぎ落とされた（あるいは、
加えることが無用であった）
音の形姿
三味線にせよ唄にせよ
その音数が
「正しい」と思わせる説得力がある
三味の音は跡
仄かに滲む
あるいは、頁を繰る指
言をひとつずつ数えるための
繰られる唄声は
額を抜けて頭蓋に心地良く響く
僕は、うっとりとした
心を持ち去られたように

《今後の予定》

二月二十三日（日） 午前十一時
国立劇場 大劇場
第八十九回 女流名家舞踊大会
地唄 ゆき 舞 華生園
地方 西松布咏

三月二日（日） 午後三時
岐阜 かわらや 大広間
第十三回 粋艶会のつどい
一門演奏会と親睦の宴

四月十二日（土） 午後一時
赤坂 赤坂クラブ
第四十七回 美紗の会のつどい
一門演奏会と親睦の夕べ

五月三十一日（土） 午後四時
神楽坂 おおさこ
第二回 おおさこの粋
江戸唄と酒のつどい

■たより 第77号
発行者 美紗の会
編集責任者 大久保 朋子
デザイン 近藤 幹則

■美紗の会
主宰 西松 布咏
稽古場 港区白金台三-二一-二
白金台プレイス三階
電話 （三四四一）一七二六
（五四四七）一四一二
E_mail：nfue@soleil.ocn.ne.jp
URL:http://www17.ocn.ne.jp/~misa5